「人の輪と集落の和」で農地を守り「儲ける農業」にチャレンジ

福西　義幸

野洲川の対岸を走るJR草津線の電車の音が水田地帯にこだまする滋賀県甲賀市水口町酒人地区．昭和の終わりから平成の初頭にかけ，ほぼ全戸が第2種兼業農家だったこの集落に農業崩壊が始まった．このままでは集落そのものが壊滅する．不安の中から危機意識が芽生えた．そんな状況下，集落の農地をどう守っていくのかという真剣な議論が始まった．委員会を作り時間をかけたていねいな話し合いをすすめた結果，集落一農場方式で組織営農に取り組む方向で地権者の合意が得られた．「集落の農地は自分たちの責任で後世に引き渡そう」という思いからだった．同時に，圃場基盤の整備と生活環境の改善を進めていくことも決めた．

キーワード：第2種兼業農家，農業崩壊，集落一農場方式，圃場整備，御神酒，近江下三座，甲賀流忍術，近江天保の一揆，土は命，土に生きる，水呑み百姓，集落営農ビジョン，なごやか営農グループ，すこやか営農グループ，やすらぎ営農グループ，農事組合法人

1．はじめに

大都市への通勤圏，第2・3次産業中心への産業構造の変化に伴い，都市化・核家族化が進んだ農村地域での社会変動について，我が集落での実践をもとにドキュメンタリータッチで紹介する．

2．歴史を振り返って

2.1　集落名「酒人」の由来[1]

我が集落酒人は滋賀県南東部に位置し，野洲川（旧名横田川）右岸に在し，標高は約150mの平坦地で肥沃な土壌と同水系を利用した稲作が古くから営まれてきた．集落の氏神である国中神社は，国中宮，あるいは国中大明神と称し，酒人郷の産土神としてお祀りしてきた．

そこで『掌酒由縁記』なるものによると，「人皇11代垂仁天皇の御宇4年（275年）の夏，大神の勅教により倭姫命が大神を奉じて敢都美恵宮から近江甲可の日雲宮に遷宮された．このとき柏木の荘司にあたるものが横田川の水を汲みて酒を造らせ大神に献供した．これがそもそも御神酒の始まりである．

このことを淡海国造が大いに感賞して酒人造とし神宮酒司の神役としたのである．この酒司の住むところが掌酒の里とよばれ，後の柏木荘酒人村の起源となった．天照大神はその後処々にお移りの末，五十鈴川（三重県伊勢市）の宮処に鎮座された」とのことである．

2.2　酒人と猿楽[1]

酒人の名の起りのもう一つの伝承として，中世には伊勢神宮外宮領「柏木御厨」のうち「酒人郷」として推移したことが知られ，その範囲は現在の酒人・泉にわたった．鎌倉時代末期の元徳3年（1331年）『柏木御厨目録』（山中文書・神宮文庫蔵）には，すでに酒人郷のなかに「国中宮」また「酒人寺」の名が見えている．ところで酒人の字名に「さるごう」あるいは「猿楽田」と称する場所が伝えられる．「さるごう」は能の前身である猿楽の異称「散更」の読みであり「猿楽田」は，猿楽を演じるためにあてられた田のことと考えられている．世阿弥の著した『申楽談儀』には，「近江猿楽」の下三座として「さかうと」の名が見えている．学界では早くからこれが，当地「酒人」のことであると考えられてきた．『柏木御厨目録』の柏木本郷分に「猿楽」の名が見えることからすれば，柏木御厨内に当時猿楽を行う者がいたことは確からしく，そうしてみれば酒人に伝わる地名はその史実を伝えるものと考えられる．

2.3　甲賀流忍術

甲賀流の忍術，忍者集団についてはさすが忍びの技であり，あまり文献・書物は残っていない．筆者が子供の頃村の長老から聞いた話によると「時は戦国時代，天下取りを目論む諸大名には東国の大名が多く，都

ふくにし　よしゆき
農事組合法人 酒人ふぁ～む
〒528-0054 甲賀市水口町酒人30-1

(京都) に攻め上るには必ず近江の国を通らねばならず，また，琵琶湖は都を守る天然の堀であったことから，北国街道を迂回するか東海道を西進するしか道は無かった．我が甲賀の地は幾度も戦乱に巻き込まれ，故に農民が身を隠したり農具を武器に変えて戦った術であると伝承され，また，忍び集団は個々の力はさほどなく強者を相手にする時は必ず徒党を組んだ」と教えられた．

2.4 近江天保の一揆（集落営農の起源）[2]

今から164年前，天保13年10月14日総勢1万2千人の祖先が徳川幕府の不正な検地に抗議し，「此の度野洲川筋の村々検分の儀十万日の間日延の儀聞届候事」検地役人市野茂三郎署名捺印の文書を取りつけた．我が国の歴史上ただ一つの強訴勝利を成したのであったが，その後の処断については厳しい事は程度を超して，我が村からもお二人の先祖が拷問死され「土は命・土に生きる」ことの尊さを身を持って後世に残してくれた．

3. 平成の一揆「水呑み百姓からの脱却」

〔後継者・相続人の葛藤〕

今から15年前の春，我が集落に一通の回状が回った．「(要旨) これから先の酒人の姿を考えるので，各組から30～40歳代の委員を選出せよ」……区長（集落自治会長）

早速8名の若き集落後継者が集められ，区長は開口一番「今日の我が集落に他字や地域に誇れるものは何があるのだろうか．かつては伊勢神宮の前身日雲の宮に神酒を醸じて献上した．水と米と酒司を祖先にもつ我々，我が里に今残っておるのは負けん気の強さと結の精神だけである．100年先も永々と脈打ち発展し続ける農村集落酒人のビジョン（構想）を樹立せよ」集落営農ビジョン委員会の発足となった．

8名の委員メンバーがフリーに集落の将来を語り合った．度重なる会合で内容が核心に入れば入るほど，ビジョンは生まれてこない．リーダーが言った．「酒人は行事，祭りごと，地域の付き合い，人間性，集落風情すべてが「農」と巧みに絡みあい発展してきたものである．この源の改革から議論，検討しよう」

さしあたり，先輩・父母の取り組む家業「百姓」を分析，検討することとした．「米」ではもう農業継続は不可能であり，まして投資なんてものは考えられない．後継者はいない．

集落の20～30代の若者を集めヒアリングを行った．結果「会社でもらったボーナスで農機具を購入するのは絶対にイヤ，車やったら借金してでも買うけどな……」

議論が行き詰った．リーダーが弱気になった．「おい，うちの集落もうあかんで区長に悪いけど」委員みな消沈した．気持ちは種々雑多であったが．かといって老齢農民を放っておけん．自分が生まれ育った集落は捨てられん．放っておけん情念と愛着が酒人にはある．

半年ほど月日が流れたある時期，三三五五といろんな考えを述べてくれた若者が再び集まりだした．とある日「リーダーさん，俺たちみんなで酒人の百姓するんやったらヤッタルデー」と彼らが口火を切った．

上述した内容のとおり種々の分析検討の結果，我が集落は「農」を外して集落の発展は考えられずとの委員合意となった．

道路・排水の生活環境の整備も必要，息子の嫁が来てくれ住んでくれる集落社会環境の改善も必要，ヤルことはいっぱいある．老若男女が互いにその立場を敬い，幼児が元気に走り回る，そんな集落を夢見た区長を始め区民の思いが一歩前進した．

4. みんなが参加する一集落一農場方式

平成4年に以下のビジョン合意が得られ，平成7年から圃場基盤の整備が始まった．

21世紀型農業の条件（平成4年まとめ）

1 圃場基盤の整備「一圃場1ha以上」

2 1ha圃場対応の機材と施設の整備「集落一農場確立」

3 企業センスで儲ける百姓「アグリビジネス参入」

4 意欲ある女性と高齢者を核とした新しい展開「米に依存せず」

5 支え守るのは若者，見守り知恵を授けるのは年長者「輪と和」

計画どおり平成11年には集落営農組織『営農組合酒人ふぁ～む（任意組合)』を発足した．翌年に圃場整備事業が完了，半分以上の水田が1haの大区画圃場となった．

一集落一農場の協業経営のスタートの際に大事にしたことは，「集落のみんなが参加する」こと．そのためオペレーターとして活躍できる青・壮年男性だけが農作業を担うのではなく，年齢と体力に応じて集落のみんなが農作業に参加できる仕組みを考えた．

年齢別になごやか（オペレーター以外の20～64歳

の男女)，すこやか（65～79歳男女)，やすらぎ（80歳以上）の三つの営農グループを組織し，それぞれ施設野菜担当，露地野菜・水稲栽培管理担当，雑草取り担当などと収穫出荷や管理作業をまかせることにした．高齢者や女性の知恵や力を農業に生かそうという，逆転の発想である．

5．経営体ごとのゾーン分けで集団的土地利用を実現

集落の水田面積は53 haだが，内10 haは集落外の大規模経営体が入作し，また3 haは元気な農家が自作，酒人ふぁ～むは約40 haを経営している．入作や自作地の配分は，農用地利用改善団体（集落内行政組織）が「水稲は水が鍵」との考えから，水系を考慮してそれぞれのゾーニングを行っている．

酒人ふぁ～むでは，農地を二つのブロックに分け，水稲→麦→大豆の二年三作ローテーション栽培を行っており，生産調整率は50%に達している．つまり1年に3回播種をして3回収穫しようとの，リスク・コスト・労務の分散体制による「安定経営」を狙っているからである．

こういった経営判断が可能になるのも，経営体ごとの農地のゾーン分けを行い，集団的土地利用ができあがっているからである．

6．水稲＋麦・大豆経営の3本目の柱は「野菜」生産

水稲の育苗が終った4棟のハウスでは，なごやか営農グループの女性たちが，滋賀県の定めた栽培基準による「環境こだわり野菜」の栽培を行っている．発想は，孫に食べさせる野菜が作りたいとの思いからである．いつしか市場で評価され「酒人の旬」との名がついた．サニーレタス，ホウレンソウ，コマツナ，トマトなどいずれも母の温もりが感じられる．

ブロッコリー畑で作業をするのは，すこやか営農グループの男女，全員65歳以上だが，作業の早さと楽しげなおしゃべりの声は若々しく頼もしい．担当しているのは，露地野菜と水稲の水管理，オペレーターは平日は勤めに出ているので，毎日圃場に目を配ることのできるお年寄りたちは，日常の水田管理にとってなくてはならない存在だ．農業はできないが農作業への参加がこのグループの生きがいの場となっている．

白菜は漬物会社との契約栽培，ブロッコリーは大津・京都市場への出荷，また出荷調整が可能なカボチャは市場価格を見ての一喜一憂，まるで童心に返ったようなお年寄りたちの頑張りである．

さらに，「老人会の横綱・大関」とも言うべき，やすらぎ営農グループの活躍も見逃せない．夏期は早朝5時出動，冬期は寒極まる日，温暖なハウスが井戸端会議の会場である．口以上に手も動く，薬剤の使えない軟弱野菜の雑草取りが担当，「いくつになってもよいのう．こうしてみんなと話ができる酒人に嫁に来て」とは御年88歳のおばあちゃん．まさに「旬の里」酒人づくりは動いている．

7．法人化と販売を見据えた栽培で「儲ける」経営をめざす

平成17年3月に「新たな食糧・農業・農村基本計画」において，①品目横断的経営安定対策，②米政策改革推進対策，③農地・水・環境保全向上対策が閣議決定され，「担い手」に対象を絞り，経営全体に着目した所得政策（日本型直接支払制度）へと政策転換がなされた．

今，まさに日本農業は激動期を迎えている．我が酒人集落もこの激動する農業情勢に対処しようと，今日まで一回も農作業をしたことのない若者がオペレーターに志願したり，若い女性が生ごみ堆肥づくりをしたり，集落全体が変わってきた．「人の輪と集落の和」が大きくなることで，人々の動き方や集落そのものが確かに変わりつつあるようだ．

酒人ふぁ～むは平成14年12月に法人成りを行い，これにより機械や施設などの資産管理，農産物の販売，収益分配などの一元管理が可能となった．さらに集落は人材の宝庫である．「販売を見据えた生産」という企業的発想や経営管理と，農業外での勤務経験が「儲ける」農業を実践させていこうとしている．

参考文献

[1] 郷土史家　故山崎重夫誌
[2] JA甲賀郡広報紙「天保義民と碑」
[3] 滋賀県農業会議広報紙
[4] (農)酒人ふぁ～むリーフレット